

# 東京都の男町と女町の形成

Formation of gender-biased town in Tokyo

坂井博通（埼玉県立大学）

Hiromichi Sakai(Saitama Prefectural University)

[sakai-hiromichi@spu.ac.jp](mailto:sakai-hiromichi@spu.ac.jp)

## はじめに

坂井（2017）は、日本の地域別人口に注目し、①近年市部の性比が郡部よりも低く推移してきたが、2015年にすべての生産年齢人口（5歳階級）において市部は郡部よりも低い人口性比となった。②東京圏と大阪圏では東京圏の性比が一貫して大きいなど、1980年から2015年にかけて地域性比の特徴は持続している。③特に2010年と2015年の都道府県別性比を比較すると、性比の低下が大きかった（＝女性化）のが神奈川、埼玉、大阪、東京、奈良、京都、北海道、兵庫と大都市を擁する地域である。④とりわけ区部では人口性比の低下が見られる地域があり、いわば都会の女性化が進展している。全国の10の「中央区」に関しては、それを含む市の中でも特に性比の低いところが多いことなど見出している。

本発表はそれらの結果を踏まえ、特に東京都に注目してその性比の動向を観察するものである。東京都に注目するのは、女性の高学歴化、社会進出の影響が顕著に見られ、今後の日本の地域人口を考えるにも有用であると考えからである。

## 方法

2017年に公表された2015年の国勢調査結果をふまえ、過去（主に1920年以降）からの東京都（区市町村）の動向を検討する。

## 結果と若干の考察

① 東京都の人口性比は1920年から1970年ごろにかけて特別区部よりも市町村部の方が低く推移するが、それ以降特別区部の方が低く推移。

② 0～14歳人口については、戦前は特別区部と市町村部の差が比較的大きく、市町村部の方が低かった。それは主に男児の死亡率の地域差によるものと考えられる。しかし、戦後は、一貫して市町村部の方が性比が高く推移しているが、これは子どもの性別による人口移動の相違によると考えられる。

③ 15～64歳に関しては、戦前は特別区部の性比が市町村部よりかなり大きく、戦後1960年代の後半までその傾向が続くが、その後反転して市町村部の性比がより高く推移している。

④ 65歳以上人口に関しては、戦前は市町村部の方が高く、戦後は高度経済成長期に特別区部が高くなったが、その後は市町村部の方が高くなっている。これは、65歳になる前の移動によってもたらされていると考えられる。

⑤ 総人口性比をさらに地域別に見てみると、区部については、高い性比から低い性比への流れへ、逆に島を含む市町村部については、低い性比から高い性比への流れが顕著となる（表参照）。また、区部の中でも典型的な女町港区と典型的な男町台東区の違いが明白になっている（図参照）。他方、市部では府中市のように変わらぬ男町地域もあれば、武蔵野市や三鷹市のような女町化が進む市部もある。

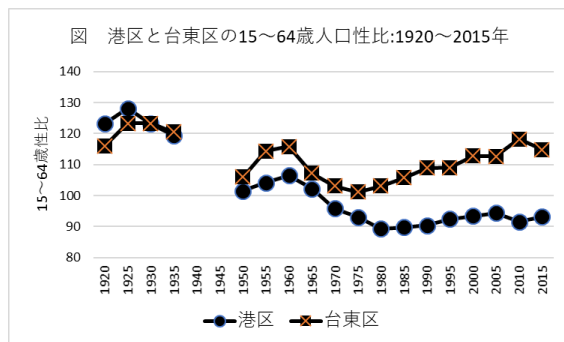
⑥ 近年女町化が見られる区は経済的に豊かな地域が多い。高層マンションの上階になるほど女性の居住割合が高くなることに象徴されるように、女性の高学歴化・キャリア上の成功・未婚化が豊かな町の女町化を促していると思われる。

なお、詳細なデータは当日の資料を参照のこと。

表 東京都の人口性比:1920~2015年

地域	年次			順位		
	1920年	1980年	2015年	1920年	1980年	2015年
東京都	112	102	97	—	—	—
特別区部	113	101	97	—	—	—
千代田区	<b>132</b>	95	<b>101</b>	1	20	5
中央区	<b>128</b>	94	92	2	21	20
港区	<b>115</b>	90	89	8	23	23
新宿区	109	99	<b>101</b>	13	17	7
文京区	<b>112</b>	97	93	10	18	17
台東区	111	100	<b>108</b>	12	12	1
墨田区	<b>114</b>	100	<b>100</b>	9	14	10
江東区	<b>112</b>	<b>108</b>	98	11	1	12
品川区	106	99	98	17	16	14
目黒区	<b>120</b>	96	89	4	19	22
大田区	107	<b>104</b>	<b>101</b>	16	2	6
世田谷区	<b>124</b>	<b>102</b>	90	3	7	21
渋谷区	106	92	93	19	22	19
中野区	<b>118</b>	<b>100</b>	<b>102</b>	5	11	4
杉並区	108	100	93	14	13	18
豊島区	<b>115</b>	<b>100</b>	<b>102</b>	7	10	2
北区	105	99	<b>99</b>	20	15	11
荒川区	107	<b>103</b>	98	15	6	13
板橋区	104	<b>103</b>	97	23	4	15
練馬区	104	<b>103</b>	95	22	5	16
足立区	104	<b>102</b>	<b>100</b>	21	8	9
葛飾区	<b>115</b>	<b>102</b>	<b>100</b>	6	9	8
江戸川区	106	<b>104</b>	<b>102</b>	18	3	3

地域	年次			順位		
	1920年	1980年	2015年	1920年	1980年	2015年
八王子市	92	104	102	53	21	12
立川市	106	100	97	21	42	36
武蔵野市	<b>108</b>	103	92	16	26	58
三鷹市	<b>101</b>	<b>108</b>	94	36	8	53
青梅市	96	102	<b>100</b>	46	37	23
府中市	<b>103</b>	<b>112</b>	<b>103</b>	30	5	10
昭島市	<b>101</b>	102	<b>99</b>	35	34	30
調布市	<b>101</b>	<b>108</b>	96	34	6	47
町田市	<b>100</b>	100	96	37	41	40
小金井市	94	<b>108</b>	98	51	9	31
小平市	<b>100</b>	<b>107</b>	97	38	11	35
日野市	97	<b>108</b>	<b>100</b>	45	14	20
東村山市	<b>104</b>	102	96	26	31	46
国分寺市	<b>102</b>	<b>107</b>	96	31	13	41
国立市	<b>102</b>	102	95	33	35	49
福生市	86	99	<b>100</b>	60	46	21
狛江市	<b>100</b>	<b>108</b>	96	39	10	48
東大和市	96	103	96	48	25	39
清瀬市	97	99	92	44	48	57
東久留米市	92	102	95	54	30	51
武蔵村山市	94	<b>107</b>	<b>100</b>	50	12	25
多摩市	99	102	96	42	36	42
稲城市	<b>100</b>	<b>105</b>	<b>101</b>	40	16	16
羽村市	87	<b>108</b>	<b>104</b>	58	7	9
あきる野市			<b>99</b>			29
西東京市			96			44
瑞穂町	96	103	<b>103</b>	47	23	11
日の出町	98	102	95	43	28	52
檜原村	<b>106</b>	<b>104</b>	96	20	19	43
奥多摩町	<b>110</b>	100	97	14	38	37
大島町	94	95	<b>105</b>	49	57	8
利島村	<b>99</b>	<b>112</b>	<b>131</b>	41	4	3
新島村	91	98	96	56	52	45
神津島村	86	<b>104</b>	<b>105</b>	59	17	7
三宅村	90	97	<b>119</b>	57	53	5
御蔵島村	91	<b>116</b>	<b>129</b>	55	3	4
八丈町	94	98	<b>99</b>	52	51	28
青ヶ島村	<b>102</b>	<b>131</b>	<b>151</b>	32	2	2
小笠原村	<b>119</b>	<b>189</b>	<b>168</b>	5	1	1



資料) 坂井博通 (2017) 「近年の地域別人口性比の動向」 日本人口学会発表資料